平成 19 年度「情報科学研究科支援経費（シンポジウム開催支援）」を頂いたことにつき、深く感謝いたしますとともに、以下のとおり実施内容をご報告します。

主催　　ナラティヴ・メディア研究会
共催　　情報科学研究科

ワークショップ名　コミック研究のフレーム再考のために　―　研究方法の多様化と今後の展望（Revisiting Frameworks for Studying Comics: Methodologies and Perspectives）

開催日・場所　　2008 年 2 月 9 日　情報科学研究科　大講義室

参加者数　　60～70 名（発表者 6 名を含む）

当該ワークショップの概要と成果

本ワークショップは、コミックを中心とする現代の物語媒体を研究対象とする「ナラティヴ・メディア研究会」(本研究科教員・学生を含む、本学研究者の研究プロジェクトが母体)の主催、情報科学研究科の共催によるもので、欧米および日本におけるコミックの本格的な学術研究の開始以後の研究動向を踏まえ、方法論上の展望を得ることを目的とした。

ワークショップの前半【研究発表】では、現在博士論文を執筆中の四名が発表した。岩下朋世氏（東北大院生）は、手塚治虫の少女マンガについての博士論文を準備中であり、そのためのマンガ研究の「フレーム」整理の作業、とりわけ 70 年代以前の少女マンガを論じるための新たなフレームの提示を行った。1970 年代を「少女マンガの完成期」とみなす言説の検証を通して、70 年代にマンガの論じ方の何が変ったのか、少女マンガ論においてマンガ表現論を活用することがなぜ重要なのかを論じた。木村雅史氏（同）は、「吹き出しの外の文字情報によって内面が描き出される」という、特に少女マンガの技法としてよく引用される説明（大塚英志）に対し、黒田硫黄のマンガ作品の分析を通して、身体表現を通じてなされる「内面描写」のありかたを提示した。三浦知志氏（同）は、1970 年代以降記号論的アプローチにより大胆なコマ割りなど表現上の革新性が高く評価されたアメリカのマンガ家 Winsor McCay の作品について、作品の描かれた時代の文化的なコンテクスト、すなわちコミックが一種の即興芸のように見なされていた背景から見直す必要性を論じ、作品評価における時代錯誤の問題をとりあげた。ジュリアン・ブヴァール氏（山梨大講師

／リヨン大博士課程）は、文化研究の手法を用いて、マンガと政治イデオロギーとの関係、およびマンガを出版・購読・評価・規制することの政治性を論じた。

後半【講演と全体討論】では、第一線のマンガ研究者・評論家による話題提供と参加者による討論を行った。伊藤剛氏（武蔵野美術大非常勤講師）は、教育の場でマンガ実作指導と理論研究の双方に携わった経験から、実作指導（技術指導）とマンガ表現論（理論研究）とのあいだにはどのような接点を見いだすことができるかを論じた。元来、マンガの表現技術は、ストーリーを効率よく伝えるための透明なものとして継承される傾向があった。これに対し伊藤氏は、菅野博之らの技法解説書の分析を通して、マンガの表現制度・技術はストーリーに先行して存在するものであるという視点を導き、マンガ「によって」物語が語られるのでなく、マンガそのものが世界把握の一様式であり、マンガ自体が知であるのだと論じた。その顕著な例として、ストーリー展開を制御する「コマ割り」の働きを、「視線誘導」「カメラの想定」「時間の記述」という３つの機能を概説した。宮本大人氏（北九州市立大学）は、マンガの中の「言葉の多層性」をめぐる議論（大塚英志、夏目房之介ら）と、マンガにおける「リアリティ」に関する議論（伊藤剛）とを整合的に接続させることで、言葉による「リアリティ」の創出についての理論を提示した。また、マンガ作品内の言葉の多層化が、歴史的に見ると、マンガとそのメタテクスト（マンガについての言葉）およびパラテクスト（マンガを物理的に取り巻く雑多な言葉）との関係を変えていく契機となった可能性を示唆した。

全体として、表現論から見たマンガとメディア論から見たマンガ、芸術としてのマンガと娯楽としてのマンガ、自ら描くものとしてのマンガと読む対象としてのマンガ、といった、拮抗するさまざまな軸からマンガにアプローチすること、それらを研究対象に応じて方法論を意識化していくことの必要性が再確認された。

会場では、当初の予想を大きく上回る聴衆に恵まれ、長時間にわたって活気ある討論が続けられた。参加者（聴衆）の内訳は、東北大関係では情報科学の学生・教員のほか、文学部の学生・卒業生・教員、法学部、経済学部、工学部、理学部数学科、生命科学研究科の学生。学外からは山形大人文学部（表象文化）の学生数名および教員のほか、東京からも４名の来聴者（評論家、大学教員など）があった。

<u>添付資料</u>　１．プログラム　２．写真　３．予稿集（加筆訂正のうえ、19 年度内に報告書として今年度中に印刷予定）